

コルチャック児童文学作品の教育学的検討

企画者：塚本智宏（東海大学札幌キャンパス）

司会者：石川道夫（藤田保健衛生大学）

塚本智宏

報告者1：小田倉泉（埼玉大学）

報告者2：柴田千賀子（桜の聖母短期大学）

0. コルチャック児童文学作品の教育学的検討

塚本智宏

没後 70 年の国際的なコルチャック年（2012 年）の各国での記念行事開催を前後して、我が国でも映画『コルチャック先生』DVD の作成やコルチャック先生の伝記絵本の出版などコルチャックの生涯（1978-1942 年）に改めて関心もたれていると共に、彼が子ども向けに書いた著作『王様マチウシ一世』の新版も刊行されるに至っている（「子どものための美しい国 王様マチウシ王物語」）。本ラウンドテーブルでは、1920 年代の彼の黄金時代と呼ばれている活発な著作活動の中で、特に児童文学作品に焦点をあて、そのいくつかの作品を具体的な検討対象として、彼が子どもに対する大人の態度・関係の在り方の現状や課題をどのように考え、また、直に子どもたちには、何を伝えようとしていたのか、その教育的な考察を試みたい。コルチャック研究をすすめているお二人の若手研究者の報告をもとに幼児教育や保育の現場で実践を続けている実践家達との交流もぜひ進めていきたい。

1. 『もう一度子どもになれば』(1925)に描かれた子ども時代とその世界

小田倉泉

『もう一度子どもになれば』(原題:“Kiedy znów będę mały”)は、コルチャックの作品の中でも、日本に紹介された数少ないものの一つである。1993 年に図書出版社より近藤康子氏によって出版された本作品のタイトルは『もう一度子供になれば』であるため、日本において親しまれているタイトルを本報告においても使用する。

本作品は、主人公「僕」が、大人の生活に疲れ、子ども時代に思いはせている場面から始まる。ある夜「僕」は、幸せな子ども時代の日々に戻ることを願う。すると「僕」は、「小人の魔法」によって子どもに戻り、子ども時代を再体験することになる。「僕」は、「大人になったことがある」ことを隠し、「今までずっと小さい男の子だったようなふりをして」子どもとしての生活を始める。

コルチャックは、子どもに戻った「僕」の経験を、子ども時代を再体験する自分を客観視する「大人」としての「僕」と、「子ども」を再体験している「僕」、この 2 つの目を通して描写している。Cohen(1994)は、この描写方法が、子どもの見方と教師の内省、子どもの内面と外的面の両方から、教育の過程を描くことを可能にしているとし、本作品を教育的作品と文学的な小説が融合したものであると述べる。

ホリンデイル(2002)は、子ども文学において描かれる子ども時代は、作家によって構築されたものであるが、作家の提示した子ども時代とは「常に時代遅れ」であって「大人は決して子ども時代の現在性を生きることができない」と、文学における子ども時代描写の限界について述べている。しかし本作品は、子どもの内面世界を主観的且つ客観的に描き出し、「大人が子どもの世界に入るチャンスを与える」(V.P.Parsegian,1992)ことによって、大人の子どもの理解の深化に資する作品となっているのではないかとと思われる。

本報告では、子ども時代とその世界を描いた本作品の教育的意義を検討していきたい。

【引用・参考文献】

Adir.Cohen, *The Gate of Light Janusz Korczak the Educator, and Writer Who Overcome the Holocaust*, Associated University Presses 1994.

ピーター・ホリンデイル『子どもと大人が出会う場所一本の中の「子ども性」を探る』猪熊葉子監訳、柏書房、2002年。

V.P.Parsegian, Foreword: *When I am little again / The Child's Right To Respect, Janusz Korczak*, translated from the Polish with introduction by E.P.Kulawiec University Press of America 1992.



2. 『孤島の王様マチュシ』からコルチャックの子ども観形成の軌跡をたどる 柴田千賀子

「人間としての子どもを探求し、子どもの権利の尊重を求めた教育者」であるコルチャックは、いかにして「人間としての子ども」という子ども観を形成していったのだろうか。子どもを人間としてみることは至極当たり前に思えるが、社会の中で、決して当然のこととして捉えられてはいないというのが現実であろう。それは、どうしてなのだろうか。なぜ、コルチャックは「人間としての子ども」を見いだせたのだろうか。

コルチャックは、1929年に「子どもの尊重に関する権利」という、彼の思想の中心となる考えにたどり着く過程において、いくつかの物語を世におくり出している。その一つに、『孤島の王様マチュシ』(1923)がある。この物語の主人公「マチュシ」という男の子は、先に出版された『王様マチュシー世』(1923)にも登場する。『王様マチュシー世』は、複数の邦題にて翻訳、出版されている。『孤島の王様マチュシ』は、未だ英訳、邦訳はなされていないため、本報告では報告者柴田のフランス語版からの翻訳を紹介したい。

ヴァウトラウト・ケルベル・ガンセ氏は、コルチャックが1929年に子どもの尊重に関する権利という彼の思想の中心に至る過程において、その思想への修正が施されており、その過程を探るうえで『王様マチュシー世』、『孤島の王様マチュシ』は注目すべき作品であると述べている^{※1}。前者には、社会を変えるために子どもを尊重してみることが中心として描かれている。一方、『孤島の王様マチュシ』には、大人が子どもをどのように見るか、大人がどのような子ども観をもつかということに真摯に向き合わずして、子どもを理解することはできない、というコルチャックの強いメッセージが込められている。

本報告では、全35章から成る『孤島の王様マチュシ』を紹介し、コルチャックの思想の発展の片鱗を物語の中から探ることを試みたい。そして、コルチャックの子ども観形成の軌跡を手がかりとして、保育における子どもと大人の関係性や、「子ども観」を刷新する必要性についても触れていきたい。

^{※1} ヴァウトラウト・ケルベル・ガンセ『最近のコルチャック研究から考えること』日本子どもを守る会主催講演「コルチャック先生と子どもの権利条約」2010（通訳：世取山洋介）

【引用・参考文献】

塚本智宏『コルチャック先生と子どもの権利』「子どものしあわせ No. 694」草土文化、2008年

Janusz Korczak (Maurice Weidenfeld 訳) 『Le roi Mathias sur une Ile Désert』 1986